

昔むかし、ある村で、娘が七人、遊んでいました。一番年上の娘がいました。

「ねえ、みんな、とびきりのおしゃれをして、森のアカシアの木まで出かけましょうよ。

木に登って実を集めましょう」

娘たちは、家に帰って着飾ってもどつてきました。けれども、一番小さい娘は、貧しかったので、みすばらしい服のままでした。

アカシアの木まで来ると、実が鈴なりになっていました。みんなは大喜びで、一番年上の娘にいました。

「あなた、木に登って実を落としてよ。わたしたち葉拾うから。あなたのかごもいっぱいにするわ」

「どうして、わたしなの。わたし、お母さんの新しい服を着てきたのよ。もし破いたらぶたれるわ。わたしは登らない。あんたたちのうちのだれかが登りなさいよ」

そこで、娘たちは、二番目の娘にいました。

「あなたが、木に登って実を落としてよ。わたしたちは拾うから。あなたのかごもいっぱいにするわ」

「どうして、わたしなの。わたし、お母さんの新しいサンダルをはいてきたのよ。もしひつかいたらぶたれるわ。わたしは登らない。あんたたちのうちのだれかが登りなさいよ」

娘たちは、三番目の娘にいました。

「あなた、木に登って実を落としてよ。あなたのかごもいっぱいにするわ」

「どうして、わたしなの。わたし、お母さんの新しいスカーフをしてきたのよ。もし破いたらぶたれるわ。わたしは登らない。あんたたちのうちのだれかが登りなさいよ」

四番目の娘にいました。

「わたし、お母さんの新しいヴェールを着てきたのよ。もし破いたらぶたれるわ。わたしは登らない。あんたたちのうちのだれかが登りなさいよ」

五番目の娘にいました。

「わたし、お母さんの新しいズボンをはいてきたのよ。もし破いたらぶたれるわ。わたしは登らない。あんたたちのうちのだれかが登りなさいよ」

六番目の娘にいました。

「わたし、お母さんの銀のくさりをしてるのよ。もしも切れたりしたら、ぶたれるわ。わたしは登らない。ぜったいに」

そこで、みんなは、小さい娘にいました。

「あんたの服は、古いし、ぼろぼろだわ。あんたが登ってよ。いちばんいい実をあんたのかごに入れてあげるから」

「ええ、いいわ。でも木登りを手伝ってね」

「ええ、登るときも下りるときも手伝ってあげる」

小さい娘は、みんなに手伝ってもらって木に登りました。そして、大きな実を探しては下に落としました。娘たちのかごはすぐにいっぱいになりました。そして、そのまま、かごを持って走って帰ってしまいました。

小さい娘は、木から下りることができず、大声で泣きました。

「もどってきて私を下へおろしてよ」

そこへ、男がひとり、近づいてきました。娘が、

「アラーの神さまが、あの人をおよこしになったんだわ」と喜んでいると、男はいいました。

「人間の肉のにおいがする

おれの国の肉じゃない

おれの歯でかみつぶしてくれる

おれの門歯と臼歯でな」

それは、荒野の精霊ジャルジューフでした。娘はいいました。

「こんばんは。すばらしい夕暮れですね。どうか、木から下りるのを手伝ってくださいな」

ジャルジューフは、

「はつきりいつて まずあいさつから始めなかったら

おまえの肉も骨も とうにおれの腹の中

おれの後から、あと六人、ジャルジューフが来る。運がよければ、おまえをあわれんで、助けてくれるやつがいるかもしれない」といつて、そのまま行ってしまいました。

いくらかたたないうちに、また男がひとりやってきました。

「こんばんは。すばらしい夕暮れですね。どうか、木から下りるのを手伝ってくださいな」

娘が言うと、男は、

「はつきりいつて まずあいさつから始めなかったら

おまえの肉も骨も とうにおれの腹の中

おれの後から、あと五人、ジャルジューフが来る。運がよければ、おまえをあわれんで、助けてくれるやつがいるかもしれない」といつて、行ってしまいました。

そこへ、三人目の男がやってきました。こうして、つぎからつぎへとジャルジューフがやってきては、行ってしまいました。

とうとう、七人目のジャルジューフが来ました。

「幸せいつぱいの、すばらしい夕暮れですね。わたし、もうずうっと長い間ここにいるんです。どうか、木から下りるのを手伝ってくださいな」

「じゃあ、そこから飛び降りるんだね。おれが両手で受け止めてやる。もしおまえが、おれの親指の上に落ちたら、おれはおまえを食ってやる。人差し指の上に落ちたら、また木の上に投げもどしてやる。中指の上に落ちたら、おまえはおれと結婚するんだ。薬指の上に落ちたら、おまえをあの人世へ送ってやる。小指の上に落ちたら、おまえは自由

だ。わかったか」

「わかったわ」

「さあ、飛べ」

娘は、ジャルジューフの手に飛び降りました。すると、中指の上に落ちました。

ジャルジューフは、娘を連れて大地の上を飛び、高い山のとっぺんにある大きな城につきました。ジャルジューフは、美しい若者に変身して、娘に優しく親切にしてくれました。そこで、娘もジャルジューフを愛するようになりました。

あるとき、ジャルジューフは、娘を案内して、城の六つの部屋を見せました。けれども、最後の七番目の部屋の前まで来るといいました。

「おまえがおれを愛しているなら、この七番目の部屋だけは決して開けてはいけない。カギをさがしてもいけない」

「わかったわ」

ある日のこと、ジャルジューフが出かけていたとき、娘は、七番目の部屋を開けてみたくてたまらなくなりました。そして、カギをさがしてようやく見つけ、とびらを開けました。そこには、人間の骨が山のように積み上げられていました。娘は、恐ろしくて、大急ぎでとびらを閉めました。

その晩、ジャルジューフがもどってきて、娘のようすがおかしいのに気づきました。

「どうしたんだい。何かあったのかい」

「いいえ、何もないわ。体の具合が少しよくないだけよ」

そのときから、ジャルジューフは、娘から目を離そうとしなくなりました。娘は、どんどん、顔色が悪くなっていきました。

ある日、ジャルジューフが、娘に、

「おまえのようすは、日に日に悪くなっている。一度、お母さんを連れてきてあげよう」といいました。そして、荒野に出かけて行って、娘の母親に化けてもどつてきました。

娘は母親を見て大喜びしました。母親に化けたジャルジューフは、

「おまえが急にいなくなったもんだから、それはそれは心配してたんだよ。何だか具合が悪そうじゃないか。何があったか、話してごらん」といいました。娘は、

「わたしは、なに不自由なく満足に暮らしているわ。夫はいい人で、とてもよくしてくれるのよ」と答えました。母親に化けたジャルジューフは、娘が七番目の部屋のことを話さないで、そのまま帰って行きました。

娘はますます顔色が悪くなり、ジャルジューフはますます娘を疑うようになりました。ある日、ジャルジューフは、

「おまえの友だちを連れてきてあげよう。少しは元気になるかもしれない」といいました。そして、荒野に出かけて行って、娘の一番仲良しの友だちに化けてもどつて来ました。

「あなた、急にいなくなったりして、いったい今までどうしていたの。具合が悪そうだけれど何かあったの。」

「わたしは、なに不自由なく満足に暮らしているわ。夫はわたしにとてもよくしてくれるの。でも、ひとつだけ、気に入らないことがあって、それで病氣になったの」

「まあ、それは何かしら。かくさずに話してちょうだい」と、友だちに化けたジャルジューフはいいました。娘は、

「じゃあ、話すけど。このお城にはすばらしい部屋が六つあって、ぜんぶわたしたちのものよ。ただ、もうひとつ七番目の部屋があるんだけど、夫に、この部屋だけは決して開けてはいけない、カギをさがしてもいけないといわれているの。それなのに、こっそり開けてしまったのよ。中に何があったと思う。人間の骨の山。夫が食べていたのよ」といいました。友だちは、

「でも、旦那さんがあなたを大切にしてくるんなら、がまんしなさいよ。あなたには何もしないに決まってるわ」といつて、帰っていきました。そして、荒野まで来ると元のすがたになって家にもどりました。それから、いつ娘を食べようかと様子を見ていました。

ある日、娘は思い切って家をぬけだしました。荒野を歩きに歩いていると。遠くにひとりの羊飼いのすがたを見つけました。近づいてみると、それは弟のアリでした。アリは、おどろいて、

「姉さん、どうしてこんなところにいるんだい。みんなでそこいらじゅうをさがしてたんだよ」といいました。娘は、

「変ねえ。このあいだお母さんが訪ねてきたわ。わたしが結婚して大きなお城に暮らしているのを知っているでしょう」といいました。

「とんでもない。母さんは、姉さんの所になんか行ったことはないよ」と、アリはいいました。

ふたりが、逃げようとしていると、いきなりジャルジューフが現れました。ジャルジューフは、ア리를歓迎して、しばらく泊まっていくようにといいました。

二日たつと、ジャルジューフが、娘に、

「アリといっしょに市に行ってくるよ」といつて、出かけました。そして、荒野まで来ると、アリにおそいかかり、アリの肉をかごにつめてもどりました。とちゅうで、白いはげたかが飛んできて、かごから、指輪をはめたアリの指をくわえて飛び去りました。はげたかは、城の中庭まで飛んできると、娘のひざに、指を落として、いいました。

「ああ、マルヤム ああ、マルヤム おまえの弟が殺された

ああ、マルヤム これがその指 その指輪だよ」

娘が驚いていると、はげたかがいいました。

「もうすぐジャルジューフが帰ってくる。かごに入れているのは、おまえの弟の肉なんだよ」

やがて、ジャルジューフが帰ってきて、かごを差し出し、

「アリは、市で用がすむと家に帰っていったよ。おまえによろしくといっていた。さあ、飯にしてくれ」といいました。娘は、食事のしたくをしましたが、自分は一口も食べま

せんでした。ジャルジューフは、食べ終わると、横になって眠ってしまいました。

娘は、アリの骨を集めて、お墓を掘り、指輪をはめた指と一つしよにうめました。そして、毎日、お墓に水をやりました。すると、お墓から木が生えて、どんどん大きくなりました。

ある日のこと、娘がお墓に水をやってから、小さな枝を一本折ると、そこから、美しい小さい男の子が生まれました。娘は喜んで、男の子を抱き上げ、ミルクを飲ませました。

そこへ、ジャルジューフが帰ってきました。

「人間の肉のにおいがする

おれの国の肉じゃない

おれの歯でかみつぶしてくれる

おれの門歯と臼歯でな」

娘は、

「ここには、わたしと、あなたの息子しかいないわ」といいました。

「なんだって、おれの息子だって」

ジャルジューフは、大喜びしました。そして、息子のためなら、どんなことでもしてやりました。

やがて、息子は大きくなり、りっぱな若者になりました。

ある日、娘は、若者にいいました。

「あなたは、わたしの息子ではなく、弟のアリなのです。ジャルジューフがあなたを殺し、わたしはあなたの骨と指輪をお墓に埋めました。すると、お墓から木が生えて、その木の枝からあなたが生まれたのです」

若者は、驚き、

「そうだったのか。あいつをやっつけて、ここから逃げ出そう」といいました。娘はいいました。

「では、わたしのいうとおりにしてちょうだい。夜になると、ジャルジューフは、わたしのひざに頭を乗せて眠ります。その首を切り落とすのよ。ただし、ジャルジューフは、ジャルジューフの剣でしか殺せないの。しかも、一太刀で切らなければ、生き返ってしまう。二度切ってはだめです。ジャルジューフの首が、話しかけてくるだろうけれど、けっしていうとおりにしてはいけません。剣を抜くときは、綿をまいて、音を立てないように少しずつ抜くのですよ。それから、ジャルジューフは、ぐっすり眠っているときは目を開けています。目を閉じているときはまだ眠っていないから気を付けてね」

夜になると、アリは、ジャルジューフの寝室にしのびこみました。アリがそっとジャルジューフの剣を抜くと、娘はひざを外して、ジャルジューフの頭の下に枕を置きました。

アリは、ジャルジューフめがけて力いっぱい切りつけました。すると、切り落とされた首がいました。

「もう一太刀切ってくれ」

「いや。二太刀はないのだ」

「では、おれを踏んづけてくれ」

「いや。おれの足は短すぎる」

「では、せめて、おれにつばをはきかけてくれ」

「いや。おれの口はからからだ」

とうとう、ジャルジューフは死んでしまいました。

娘とアリは、ジャルジューフの宝物をろばに積んで、家に帰っていきました。村の人たちは、目を丸くして驚きました。父親と母親は喜んで、

「こんな宝をどこから持ってきたんだい」とききました。

「あなたがたの義理の息子の所から」と、娘は答えました。

原話…『世界の民話35イエーメン』飯豊道男訳／ぎょうせい
再話…村上郁